

次の文章を読んで、後の問1～問7に答えなさい。

季節の境目が、子供の頃にはわからなかった。

それでも冬になると、私の家では男だけがする仕事のひとつあった。薪まき割りである。

昔はどの家も、風呂は薪で焚たいていた。男達は丸太や廃材を家に運んで、それを短く切り、（A）斧で適当な太さに割って薪をこしらえる。でき上がった薪は風呂場の近くの軒下に積んで、（注1）むしろ箆むしろをかぶせておく。

私が最初に父に薪割りを教わったのは、十歳くらいの時だった。

庭に呼ばれて、半日父と二人で薪割り作業をした。斧には大きいものと小さいものがあつた。柄の長い、刃の大きな斧は大きな木を割るのに使う。柄も刃も小さい手斧は、小片のコツパモノ（注2）（確か父はそう呼んでいた）を割るのに使った。

最初の冬は、小さい斧で薪割りをした。意外と難しかった。

「木の目にそって刃を当てなきや駄目だ。ほらっ、しっかり握ってないと、指が飛んでしまうぞ」

と脅されたり、叱しかられながら作業をした。二十分もすると身体がポカポカとしてくる。大きな斧で作業をしている父は、いつの間にか上半身は肌着姿になっていた。空に向かって大斧を振り上げる父が大男に見えた。先刻まで「（注3）」としていた庭の空気が、秋の晴れ間のように膨らんだ空気になっていた。

だがそのうち手が持ち上がらなくなる。斧がこんなに重かったかと思えてくる。指が（注2）ぎこちなくなつて、思うように動かない。自分の手ではないように思えてきた。

「休むな。これだけやってからだ」

と父が木の山を指さして言う。あわてて次の木を台の上に置く。初めのうちは、男の仕事をしているんだと妙に喜んでいたが、次第に嫌なことを手伝わされているように思えてきた。二時間程した頃に、母がお茶と菓子を持って現れた。

「ひと休みするか」

父の声で、それぞれの台の上に腰掛けて菓子をほおぼる。休憩できることと饅頭まんじゅうの甘さで、（B）嬉うれしくなったのを覚えている。

次の年は、弟が加わった。私は大きな斧を持たされた。弟は前の年に私が使った小さな斧を父から渡された。

他所よそみ見をしてると指が飛ぶぞ、と私が言われたことと同じことを弟も父から言われる。私の大きな斧は手斧より重いし、狙ねらったところになかなか刃を振り降ろせない。

「もつと足を踏んばれ。腰を落として斧を振り上げるんだ。腹に力を入れろ」

と父が私に言う。

翌年から、私と弟で薪割りをさせられた。二人だけでは、ひどく時間がかかった。木はひとつひとつ木目が違う。スパッと割れるものもあれ

ば、固くて斧が入らない木もある。それでも不思議なもので、ひと冬薪割りをすると、一見割れにくい木も、どの辺りに刃を入れれば割れるかがわかってきて、コツのようなものが見えてくる。それに前の年に重かった斧が軽いことにも気付く。

「このコッパは楽だな」

と側で弟がひとり言を言ったりする。作業をした夜、弟と風呂に入ると、「自分で作った薪の風呂は格別でしょう。冬支度をしていただい……」と(注3)釜口から母の声がした。二人とも一人前の男になったように、どこかむずがゆい気持ちになった。お互いの掌をひらいて、赤くなつた指の付け根を見せ合つたりした。

ひとつのことをずっと続けていると、自然に見えてくるものが世の中にはあるのだろう。うまく仕事が運ばなかったり、自分には無理だと感じた時でも、そのうち木の目が見えてくるし、斧も軽く思えるはずだ。数年前に古い家を壊して家を建替えた時、父は新しい家に道具置場を作つた。そこへ入ると、三十年前のあの大小の斧が壁に吊るしてあつた。

——伊集院静「あの子のカーネーション」より——

(注1) 筵……わらなどを編んで作った敷物。

(注2) ぎごちなく……「ぎごちなく」ともいう。

(注3) 釜口……薪でお風呂を焚くときに、薪を入れて火を焚きつけるところ。